

日本クーベルタン委員会通信 (公開版)

第2号 2025年2月2日

事務局：〒438-0043 静岡県磐田市大原 1572 番地 1

編集・発行

日本ピエール・ド・クーベルタン委員会

静岡産業大学スポーツ科学部スポーツ科学科 和所泰史 気付

第2号の発刊に寄せて

皆さま、日本ピエール・ド・クーベルタン委員会事務局の和所泰史です。「日本クーベルタン委員会通信」創刊号が2024年11月に発刊され、お陰様でお褒めの言葉をいただくことがあり嬉しいことでした。第2号では、昨年末に開催されたユースフォーラムの報告と、本委員会委員による2024年パリ・オリンピック・パラリンピックに関する寄稿(前半)をお届けします。今後、皆様のご期待に応えるためにもよい通信にするよう努力する心算です。今後とも、日本クーベルタン委員会通信をよろしくお願いいたします。

(和所泰史)

日本ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム 2024 報告

日本クーベルタン委員会副委員長・NPO サロン 2002 理事長 中塚義実

日本クーベルタン委員会主催の標記フォーラムが12月25~26日、オンラインと対面を併用して開催された。国際ユースフォーラムへの派遣生徒選考会として2015年に始まった事業を前身とするが、国際ユースフォーラムがなくても高校生や大学生のオリンピック教育の場として毎年開かれている。東京大会のレガシーとして、大事に育てていきたい。

◆国内 YF2024 の実際

10月にリーフレットを作成し、告知と募集を開始した。締め切りを11月22日としたが参加希望者が少なかったため募集期間を12月13日まで延長した。高校生14名、大学生5名が申し込み、初日はオンライン、二日目は中京大学と筑波大学附属高校での対面とオンラインを併用する形であった。

主催 日本ピエール・ド・クーベルタン委員会 (CJPC)

共催 特定非営利活動法人日本オリンピック・アカデミー (JOA)

主管 筑波大学オリンピック研究教育センター (CORE)、中京大学、
特定非営利活動法人サロン 2002 (NPO サロン 2002)

協力 東海学園大学スポーツ健康科学部

期日 2024年12月25日(水)、26日(木) 宿泊なし

会場 関東地区:筑波大学附属高等学校・桐蔭会館(東京都文京区大塚 1-9-1)

中部地区:中京大学 豊田キャンパス(愛知県豊田市貝津町床立 101)

全体テーマ スポーツとジェンダー

<参加者 計 19 名>

・高校生 14 名

中京大学附属中京高校(1)、椋山女学園高校(4)、筑波大学附属高等学校(2)

自由学園高等部(5)、国士館高等学校(2)

・大学生 5 名

自由学園最高学部(1)、国際武道大学(1)、中京大学・大学院(3)

<プログラムとスケジュール>

12 月 25 日(水) オンライン

9:00~10:15 オープニング／オリエンテーション(中塚義実、田原淳子)

10:30~11:20 講義① クーベルタンのオリンピズム(和田浩一)

11:30~12:20 講義② 嘉納治五郎とオリンピックムーブメント(大林太朗)

13:20~14:45 講義③ オリンピックとジェンダー(来田享子)

15:00~17:00 演習① 中京大学スポーツミュージアム活動(富田幸祐)

12 月 26 日(木) 対面(オンライン併用)

9:00~9:15 諸連絡等

9:15~10:05 講義④ スポーツにおけるジェンダー問題の実際(来田享子)

10:20~12:20 運動プログラム:デンマーク体操(山田恵子)、

ボッチャ対抗戦(中塚義実/木村華織、黒田佳代)

13:30~15:30 演習② OVEP で「ジェンダー」を学ぶ(宮崎明世)

15:45~16:15 グループディスカッション発表

16:25~17:00 クロージング(嶋崎雅規ほか)

※課題レポートを 12 月 27 日(金)中に提出

◆参加生徒のコメント

・初日の感想:生徒(中京大附 1 年)

和田先生が最後におっしゃっていた「私たちがどう今の社会の問題を解決するかが自分たちのオリンピズム」を聞き、クーベルタンの考えというか願いというかは現代を生きる自分たちにもしっかりと受け継がれていることに感銘を受けました。(中略)自分は嘉納治五郎を少し前にテレビで放送されていた“いだてん”で知りました。今回の講義で大林先生が、まさかいだてんの試作に携わっていたとは知らず、驚きと喜びがありました。自分が見てきた大河ドラマの中で一番好きなドラマだったので今回の YF を受けて本当に良かったと思っています。ドラマの中では今回出てきた話にも触れられていましたが、今回初めて知れたこともあったので大きな収穫だったと感じます。

・2 日目の感想:生徒(自由学園 2 年)

実際に対面でみんなに会えてよかった。グループディスカッションでもボッチャでも実際に人と関わることで見えてくるものが沢山あった。今回のテーマはスポーツとジェンダーだったけれど、ジェンダーの問題は様々なものに結びつくと思った。沢山の問題がある中で今回はスポーツという身近なものからジェンダー

について議論できて良かった。

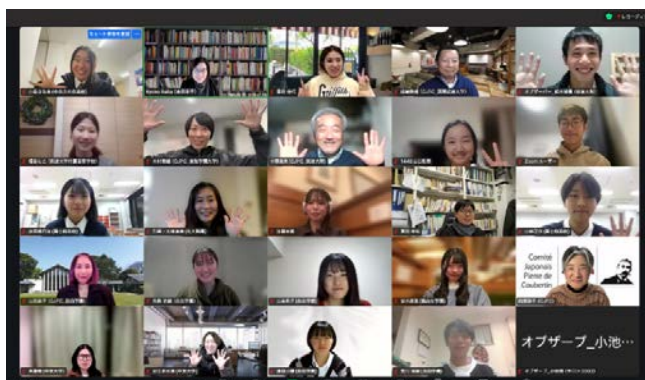
・2 日目ボッチャ交流:生徒(自由学園 1 年)

今回初めてボッチャを体験しました。ルールはシンプルな割に奥が深いゲームで楽しかったです。このゲームならだれとでも楽しめると思いました。またコートを作る際に皆で協力してできたので良かったです。

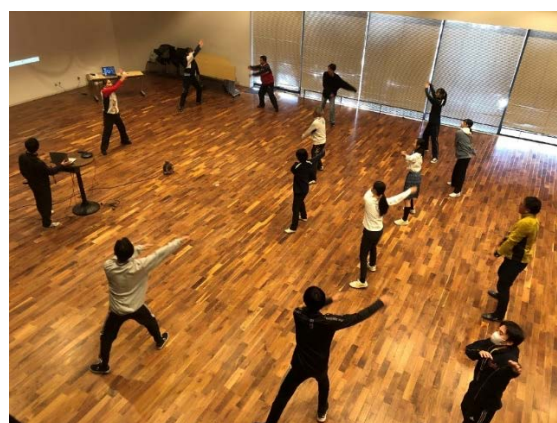
・2 日目の感想:生徒(筑波大附 1 年)

今日の形のオリンピックがあるのはかつて多くの人々が声を上げて来たからなのだなと再認識した。またそんな今日でも想像以上に男女の格差が残っており驚いた。確かに性の話はとてもセンシティブで簡単に扱えられるものではない。しかし、いつまでもタブー視していれば問題の解決に繋がらない。そのバランスがとても難しいと感じた。また、2 日目は対面で行えたことでディスカッションも昨日と比べものにならないくらい盛りあがった。それによってみんなの意見交換ができ、お互いに考えを深めることができたと思う。

◆初日のオンライン交流の様子



◆ボッチャの前にデンマーク体操



◆オンラインでつないで全員集合



「回想・パリ 2024」

昨 2024 年夏のオリンピック・パラリンピックは、言うまでもなく、クーベルタン男爵の故郷、パリで 100 年ぶりに開かれた大会となった。本委員会にも、様々な形でゆかりのこの大会と関わった方が少なくない。本号ではまず三人の委員に、1900 年、1924 年に続く3度目のパリ 2024 への思いを寄稿していただいた。(本企画は、次号にも続く)

1. パリ大会が残したもの

望月敏夫*

*日本オリンピック・アカデミー名誉会長、国土舘大学客員教授、早稲田大学招聘研究員、
元駐ギリシャ大使・外務省参与

お手本と反面教師

今後のオリンピックムーブメントの在り方という観点から、手本として「国民参加型」、反面教師として「中立個人選手 AIN (Athlète Individuel Neutre)」を選び、私の体験をまじえ感想を述べたいと思います。

なお、より分析的で包括的なパリ大会の評価は、大会後に私が霞関会9月29日付け HP に寄稿した拙文をご参照下さい。

国民参加型パリモデル

パリ大会の大会スローガンは「広く開かれた五輪 Ouvrons grand les Jeux !」ですが、原文を正確に訳すと「さあ皆で五輪を広く開こう！」となります。「開く」の動詞を完了形でなく直接法現在 1 人称複数形 (命令法) にして和訳や英訳にない国民に呼びかける政策的ニュアンスを出しています。細事に見えますが国語に敏感な仏国民は自分達宛メッセージだと受け止めたはずで、そして「広く開く」理念目標を “younger, more inclusive, more urban and more sustainable, plus full gender parity” として大会標語にしました。

具体的には、文化遺産を誇示しナショナリズムを刺激、エスプリの効いた祝祭感を演出、女性や若者を対象に68年五月革命の合言葉「参加」を再体験、全国民が感じる社会的課題に対応等を行い、大会閉幕後も市内植樹や五輪村の備品、衣類等を記念販売する「蚤の市」とネット通販を開き大盛況と報じられています。私は留学や大使館勤務等で仏人と接してきましたが、やろうと思えばこの様な配慮も出来るのかと驚嘆しました。

世界中でポピュリズムや極右勢力が伸長し五輪離れや反五輪の逆風の中、パリ大会はこれを巻き返し、一般国民を単なる観衆から五輪のステークホルダー(身内)的地位に近づけました。五輪の継続的開催に躍起の IOC と既成政党から国民政党へ変化を唱えるマクロン政権の思惑とも一致しました。10 余年後あり得る新興国五輪への手本にもなります。

「AIN」—五輪と国際政治の接点—

外交青書や内外の政治学者が国際秩序の構造的変化に伴い難題は増える一方と警告する中で、弁明の余地がない悪行のウクライナ侵攻に「平和の祭典」たる五輪がどう対応するか注目を集めました。残念ながらバツハ会長の舵取りは反省材料が多い反面教師になりました。

侵攻の当初同会長は対ロシア(以下ベラルーシを含む)制裁に同調して国際大会からロシア選手の全面排

除を国際競技団体に勧告し各国政府からも評価されました。しかしその後態度を一転し「AIN」方式と呼ぶ妥協案を勧告しました。11月国連総会での演説でその判断を釈明しています。説得的な論理があれば君子豹変も許されますが、バッハ会長はいつもレトリックでの強弁が目立ちます。今回も、国連総会の五輪休戦決議、国家と選手の二分法、G7 広島サミットの首脳声明、国連人権人道担当者の発言等に依拠していますが、不適切な引用や良いところ取りが多く見られます(詳細は2023年JOAタイムズ第46号所載の私の講演録をご参照)。例えば国連の人権分野の諸委員会は日本の死刑制度や最近では男系継承の天皇制を批判しました(林官房長官が抗議)。私は外務省国連政策課長の時に委員達とよく議論しましたが、大まじめで未来志向ですが現実の政策には役立ちません。

結局「AIN」は少数で握手拒否以外混乱なしでしたが、ロシア制裁の抜け道の悪しき先例となり、国際スポーツ界の分断を深め、プーチンに代替五輪大会を提案する隙を与えました。「非政治主義の闘士」バッハ会長は国際政治のリアリズムとの板挟みに悩むと度々告白していますが、新年交代する新会長の荷は重いです。

板挟みを打破する道はただ一つ、ウクライナ侵攻のような極端なケースに限り政治的中立と非政治主義の伝統を「止揚」して政治側と協調して対抗するしかありません。原理主義的理想のみ主張すると、先の米大統領選で流行語となった「Woke」呼ばわりされ生産的ではありません。

トランプ政権と五輪

トランプ大統領の思想や政策を保守、一国主義、保護主義、取引外交だとして、五輪憲章に掲げる諸価値に相反するとの懸念をよく聞きます。現にパリ大会での性的指向や開会式の演出を荒っぽく批判し、関税や国境の壁で勇ましい発言が続いています。

一方、夏季五輪と同じサイクルの米大統領選での発言は割り引いて考える必要があるほか、同氏はバッハ会長に電話するなどロス大会招致に協力したと述べています。また第1期目の内外政策を検証すると「意外と」合理性が認められます。私は90年代初に日本のバブルマネーがNYを買いまくっていた時期に勤務し、5番街のトランプタワーでのレセプションで同氏に会ったことがあります。破産続きの時でしたが快活なスポーツマンの印象でした。同氏の2期目のスローガンは「MAGA！」(米国を再び偉大な国に！)ですので、26年サッカーW杯を盛り上げ任期最終年のロス五輪で有終の美を飾ると思います。放映権料やスポンサー料など米国に頼るIOCの現実も続きます。

ワイルドカードは地元カリフォルニア州です。最有力の「青い州」のニューサム知事は人権、女性、移民、気候変動等でトランプ政策にとらわれないと宣言しているので、連邦でなく基本的に州の権限下にある五輪には良い環境と言えるでしょう。

トランプ氏(特にその取り巻き)の不確実性は消えませんが、パリ大会の成功部分を引き継ぐと明言しているロス大会はハリウッドの力も借りて先進成熟国型五輪を完成させると思います。

おわりに

パリ大会では日本選手の大活躍の反面、直前の大会であった東京2020への言及がなく「干された」ような感を抱いたのは私だけではないでしょう。日本のスポーツ界はここに至った諸問題に真摯に向き合い内外の信頼の回復に努め、疾風怒濤の世界にしっかり対応することが求められます。

2. 五輪史の慣例に挑んだパリ大会の「なぜ」

結城 和香子(読売新聞社編集委員)

自負と思惑

昨夏、パリ五輪・パラリンピックの取材で、現地に2か月ほど滞在した。世界に発信された華やかな祝祭感と、その裏の運営上の課題がもたらす疲労感という二面性が印象に残った。「大成功」とうたい上げられたあの大会の意味とは何だったのだろうか？ 時間を置いて振り返ると、それがより良く分かる気がする。

パリ大会は様々な形で五輪初の試みに挑んだ。セーヌ川やコンコルド広場での開会式。歴史的な名所に設営された仮設の競技会場群。持続可能性の実践をうたい、選手から観客までの行動変容を促したこと。多くの変革は現場の混乱を呼びリスクも内包していたし、五輪の慣例からの逸脱も少なくなかったが、トニー・エスタンゲ氏率いる大会組織委員会の挑戦を、国際オリンピック委員会(IOC)は容認し続けた。

エスタンゲ会長は東京大会の後、セーヌ川での開会式構想等を示唆して「斬新な発想の挑戦、それがフランス気質」だと語っていた。かたやトーマス・バッハ会長はパリで「同じアスリートだからか、トニーとの意思疎通は本当にスムーズだった。多くの変革は我々の思いを体したものだ」とし、街中で開会式を実施するのは、実は自身の示唆だったことまでにじませた。IOC が「新時代の五輪」と持ち上げるパリ大会。これが実現したのは、ピエール・ド・クーベルタン男爵の発想を生み、今新たな五輪の姿を模索しようとするフランスの自負と、五輪改革「アジェンダ 2020」を掲げて変化を促してきたバッハ会長の思惑、2つの流れが交差したからでもあるのだ。

逆風がくれたもの

それはある意味必然でもあったろう。パリは 2015 年、史上最高額のコストを計上したソチ冬季五輪の余波で、欧米の都市が軒並み立候補辞退を決め込む風潮の中で招致構想を練った。そして問題が噴出したリオデジャネイロ五輪の翌年、17年に開催地となった。「人々や社会に、大会開催が何をもたらせるのかを伝え、理解してもらう必要があった」。招致から関わる組織委のマリー・バルサク・レガシー局長は振り返る。例えば街中での式典や競技、市民マラソンの実施で、「自分ごと」として人々の参画を促す。具体的な持続可能性・レガシー戦略を早期から公約として打ち出す。逆風が、その後の大会の新たな方向性を形作った。

IOC もこの時期、五輪への批判を主因とする候補都市の減少に危機感を抱いたことが、二度にわたる「アジェンダ」改革を打ち出す素地になった。バッハ会長が会長室の壁に刻んだモットーは「Change or To Be Changed」(自ら変われなければ、変化の波にのまれる)だ。パリ大会はバッハ会長に言わせると「アジェンダ 2020 が招致計画時から適用された初の大会」であり、そのあり方はだからこそ「今後の大会のモデルとなる」というわけだ。彼が会長任期満了での退任を決意したのも、花道としてのパリ大会の成功があったからでは、との見方がある。

つけ加えれば、そこにはコロナ禍の直撃を受けた「東京大会効果」もあったのではないか。五輪憲章に規定のない延期を決め、無観客開催となり、必要最低限の機能に絞り込んだ経験は、五輪とは何かを見直す契機にもなったと IOC 関係者は語っていた。慣例から逸脱し、新たなあり方を求める柔軟性を、東京大会の体験が後押ししたのかもしれない。

舞台裏の教訓

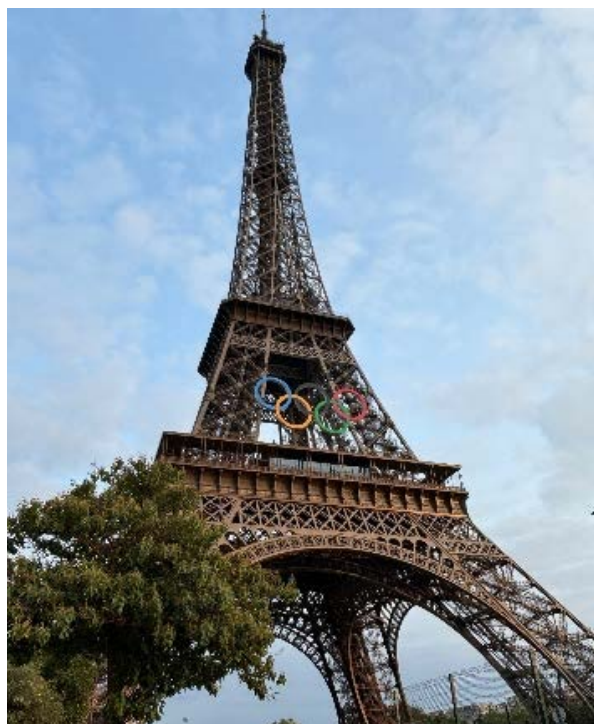
とは言っても、パリ大会の挑戦が全て「大成功」だったとは思えない。

斬新さの象徴だった開会式は記録的な豪雨に見舞われ、パレード船上の選手から、レインコートが意味をなさないような雨中に4時間座り通した筆者まで、「忘れ得ない」体験をすることに。帰路のメディアバスの自損事故で床に投げ出されたこともあり、しばらくはエッフェル塔を見るのも苦痛だった。

持続可能性の追求と広範囲の競技会場が意味したのは、地下鉄網と徒歩を旨とする移動。暑さの中、自分で水道水を補充する「マイボトル」と取材用具を背負い、1日1万5000歩、2万歩と携帯の歩数は伸びていき……しまいには脚がつって動けなくなった。

持続可能な組織運営について、帰国後パラリンピアンたちはこんな感想を述べていた。マイボトルを使おうとしても、(障害のため)中が洗えない。(視覚障害の選手は)中が洗えたかが分からない。汲みに行くのが困難な者もいる。使い捨てではない食器が選手村で使われたが、陶器の皿を落としてしまい、連日のように破片が散る。車いすのタイヤを気にして、食堂を使わなければならない——。持続可能性を主眼とするアプローチが社会の主流派を前提としており、自分なりの工夫で障壁を越えてきたパラリンピアンたちの、新たな試練となったことは貴重な教訓だ。

次期 IOC 会長の候補の中には、選手に影響が及ぶあり方等に批判的な声もあり、パリ大会がどこまで今後のモデルとなるかは未知数だ。ただ、その試みが五輪史に、過去にとらわれない柔軟性という、新たな風を吹き込んだことだけは間違いないのだろうと思う。



五つの輪が掲げられたパリのシンボル、エッフェル塔(寄稿者撮影)

3. The 4th International Colloquium of Academic Olympic Studies and Research Centres (第4回国際オリンピック学術研究センターコロキウム)参加報告

宮崎明世 (筑波大学体育系)

パリ・オリンピックの開会式を前にした、2024年7月22日、23日の2日間、フランス南部に位置するブサンソンのフランシュ・コンテ大学にて、“The 4th International Colloquium of Academic

Olympic Studies and Research Centres” (第4回国際オリンピック学術研究センターコロキウム) が開催された。このコロキウムは、夏季オリンピックの開催に際して、世界中の IOC 公認の Olympic Study and Research Centre (OSRCs) が集まって交流を深めるもので、ホスト国の OSRC が主催して開催されている。2012 年ロンドン大会の際にイギリスのラフバラ大学で行われたのが初めての会合で、前回、東京 2020 の際には、日本における唯一の IOC 公認 OSRC である筑波大学オリンピック教育研究センター (Centre for Olympic Research and Education, 略称 CORE) が主催して行ったが、コロナ禍のためオンライン開催となった。対面ではリオ以来 8 年ぶりとなる本コロキウムに、本学 CORE から筆者他 1 名が出席した。アフリカ、アジア、アメリカ、ヨーロッパ等の 26 か国から約 70 名の参加により盛大に行われた。

第 1 日目の午前中は、オープニングに続いて、開催地であるパリ大会組織委員会のインパクト&ヘリテージ部門ディレクターの講演等があり、大会のコンセプトや、オンラインによって展開されている国民の運動習慣プランや教育活動などが紹介された。その後は 2 日目にかけて、グループディスカッションが行われた。テーマは、オリンピック研究の本質、OSRCs 間のネットワーク、OSRCs が実施する共同研究と研究成果の普及強化のための戦略、OSRCs とオリンピックムーブメントの協同などで、代表者の話題提供の後、8 人程度のグループでディスカッションが行われた。共通言語は英語であったが、英語が母国語でない世界中の人々と議論するのはなかなか難しく、十分な議論ができたとは言えない状況であった。それでも、各国の事情を知ることができ、有意義な話し合いとなった。また、夜には現地ドゥー川 (Doub) に浮かぶクルーズ船でのディナー等もあり、参加者同士の交流を深めることができた。

2 日間のコロキウムの後、オプションとなった 3 日目は朝からバスで移動して、IOC 本部、オリンピック・ミュージアム、オリンピック・スタディセンターの見学ツアーが行われた。コロキウムが開催されたブサンソソから、IOC 本部があるスイス・ローザンヌまではバスで約 2 時間程度であった。このツアーでは新しくなった IOC 本部の内部を見学することができ、ミュージアムとスタディセンターでは日頃見られないバックヤードを案内してくれたりして、充実した内容であった。

オリンピックの開催国の OSRCs がこの会合を開催することになっているが、驚いたことにアメリカには OSRCs が一つもなく、次回 2028 年の開催は未定ということであった。世界の OSRCs の活動はさまざま、ヨーロッパはもちろんブラジルを中心とした南米の国々に多くの OSRCs があり、活動が盛んであるようだ。前回の東京 2020 が対面で行うことができているならば、今回のコロキウムでもより交流を深められたと思うと、コロナ禍における大会が改めて残念に思えた。

CJPC 会員による出版情報

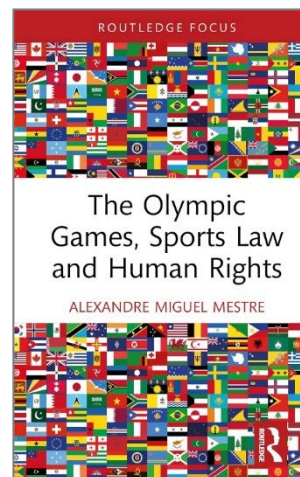
国際クーベルタン委員会理事による図書の出版情報です。

著者: Alexandre Miguel Mestre (ポルトガル)

書名等: 'The Olympic Games, Sports Law and Human Rights'.

Routledge, 2024 年 12 月 19 日発行

スポーツ法学の専門家であり、ポルトガルの青少年スポーツ担当大臣も務めた Alexandre Miguel Mestre 氏がスポーツにおける法理論や歴史を基に、オリンピック法学に関する新たな学際的視点を提示しております。是非ともご覧ください。



銀行口座について

会費が未納入の方は、会費3,000円の納入をお願いします。また、今後ホームページの作成を行うため、寄付金105,000円を募りたいと思います。ご協力のほどお願いいたします。

なお、領収書が必要な場合は宛名と郵送先を事務局までお知らせください。

銀行名：三菱 UFJ 銀行

支 店：豊田支店（店番 404）

預金種目：普通

口座番号：0831133

口座名：日本ピエール・ド・クーベルタン委員会 委員長 田原淳子

オリンピック研究国際学術誌『DIAGORAS』への投稿案内

オリンピック研究の国際学術誌『DIAGORAS』（オンライン）の編集者から、CJPC に投稿の案内がありました。お問合せなどがありましたら、事務局までご連絡ください。

募集テーマ："ESPORTS and OLYMPISM"に関するもの。Esports and new olympian trends など

投稿締め切り：2025 年 2 月 10 日

発行時期：2025 年 3 月（ギリシャでの IOC 総会后）

執筆要領：Submissions | [Diagoras: International Academic Journal on Olympic Studies](#)

編集後記

次号は 2 月に開催予定の総会のご報告と、「回想・パリ 2024」後編を予定しております。また、今後の通信について、この方にこのような原稿をという希望やご意見をお聞かせいただけたらと思います。